

「チューダー朝演劇のモノローグ」

小 林 絢 子

最近、シェイクスピア劇への関心と興味が高まっていることを本年度のゼミ生の話やプリゼミ（3年生用ゼミ）の授業で感じているが、私の専門性からいって、もう少し古い時代、つまりエリザベス I 世（在位 1558-1603）の父ヘンリー VIII 世（在位 1509-1547）、祖父ヘンリー VII 世（在位 1485-1509）の生きたチューダー朝の劇を通観してみたい。具体的には Arthur H. Nethercot 他編 “Elizabethan Plays”⁽¹⁾ 中の 4 編 (Thomas Norton & Thomas Suckville “Gorboduc” 1561; Thomas Preston “Cambises” 1569; Nicholas Udall “Roister Doister” 1566; George Gascoigne “Supposes” 1572) と “Tancred and Gismund” (1591)⁽²⁾ その他道徳劇数編を選んで、そのモノローグと傍白の部分を中心に検討していく。それぞれ英国の「最初の（本格的）悲劇」(Gorboduc)、「最初の（本格的）喜劇」(Roister Doister)、「最初のブランクヴァース使用の劇」(Gorboduc)、「最初の散文劇」(Supposes) といわれることからわかるように、英国の演劇の草分け時代の作品である。

もちろん英国では既に教会の典礼式で行うリタジカル・プレイ⁽³⁾ やクリスマス行事の精霊降誕劇が上演されていて、それらは奇跡劇にまで発展していたし、市民のレベルでもギルドなどが道徳劇などを上演することもあった。それらは演劇サイクルとして演劇提供専門の団体となるほどであり、劇以外の大道芸、剣舞、音楽演奏などと共に市民の大きな楽しみの一つであった。劇の合間に提供される間劇も上流階級に好まれていたといわれる。このような背景の中で上記の本格的演劇がどのように受け入れられていったか、聴衆

と役者の関係はどのようなものだったかということを見ていきたい。

例えば舞台設定の問題ひとつとっても、教会で上演した場合、山車の上で催した場合、あるいは宿舎の中庭で演じて見せた場合など、その舞台設置上あるいは雰囲気的面から観客と役者の関係は何か影響を受けたのであろうか、などという疑問がわく。舞台上の役者にとっても観客が身近にすぎたり、あるいは逆に役者が高いところに昇っていたりして、観客に語りかけるのに無理があったのであろうか。舞台上に人形をおき、小型の劇場の枠組みの中にシェイクスピア劇の一場面を再現した千葉県南房総市のシェイクスピア・カントリー・パークのギャラリーでみて、このような疑問が次々とわいてきた。劇にラテン語が多く含まれていたら、語りかけられても聴衆はよくわからなかったろうし⁽⁴⁾、仮面劇や無言劇ではいくら上流階級におもねろうとしても語りかけの要素そのものが少なかったにちがいない。道徳劇の“(The Brome) Abraham and Isaac” (1570-80)と“Second Shepherd’s Play”も比較の対象として考慮にいれて当時の役者がどのような独白、傍白を言ったのか、言わせられたのかを見ていく。

まず、劇を始めるときに上演させてくれたスポンサーに謝辞を述べるのは当時としては当然の儀式であっただろう。“Cambisis”ではエリザベスI世に対して上演許可を感謝しているし⁽⁵⁾、彼女への謝辞、賛辞は他の劇にも数多く散見される。⁽⁶⁾ “Gismund”の冒頭では侍女たちに対して名指しで謝意を表している。⁽⁷⁾ 上記の作品は皆宮廷または上流貴族向きの劇なのでこのようなexclusiveな献辞が捧げられたことも自然であろう。“Abraham and Isaac”の最後では殺されかかったIsaacに対する母の気持を汲みとりながら博士が説教する時に“Sirs, sovereign”と呼びかけている。⁽⁸⁾ このsovereignはエドワード4世であろう。

次に登場人物が観衆にまともな長口上を言う場合がある。これは前口上やエピローグに多く見られる。“Gorboduc”や“Supposes”ではargumentがあるが、これは呼びかけた相手が「読者」なので、実際の上演の時は省かれていたと思われる。仮面劇のように未来を予想させるものが劇の最初に上演

されたかどうかはこれらの劇では詳らかではない。“Cambises”と“R.Doister”ではプロローグを言う口上役が登場し、前者では主人公の変貌ぶりと後者では歓楽の賞賛をそれぞれ36行⁽⁹⁾と28行⁽¹⁰⁾にわたって述べている。“Tancred and Gismund”では女主人公ギズモンドの未来を暗示するように2つのソネットが提示されているが、これがどのような形で舞台にのせられたということはわからない。

エピローグの例としては“Tancred and Gismund”の先行作品“Gismund of Salerne”(1567)にあるような、とってつけたように荘厳なまとめ(32行)⁽¹¹⁾の他に、先の“Abraham”の劇のお説教、“Cambises”の悪行の許しを乞い、拝聴を感謝する言葉⁽¹²⁾と“Gorboduc”の中の大臣の長いお説教(99行)が挙げられる。その他“Supposes”ではダモンが簡単に「紳士貴顕諸君、もし我々のSupposeがお気に召したなら、我々がそれをsupposeしてもよいようなお印を頂戴したいと思います」⁽¹³⁾と言って劇を終わらせる場面が見られる。“R.Doister”ではドイスターの下僕4人が彼が死んだと思って騒いでいるうちに劇が終わってしまう。その代わり、それまで使われなかった歌や賛美歌が劇の急に出てきて大団円となるのは喜劇らしい終わり方である。

歌は一人で歌うにしてもコーラスにしても観客に解説したり、アピールしたるするのに大切な役割を担っていたと思われる。特に悲劇では説教や悲憤を訴えるのによく使われていた。“Gorboduc”では教訓や批評をあらわす歌、例えば「子供への間違った愛情は子供を台無しにする。正しい王統を守らずに国を分割することは不当」(I-I)、⁽¹⁴⁾「若さ故の高慢や怒りで行動するのはよくない」(II-ii)⁽¹⁵⁾等という台詞を歌うし、古い従兄弟殺しの例え話を出してきてポレックスの仕業を呪う歌(III-i)⁽¹⁶⁾、王妃がポレックスを死に追いやったことを非難する歌(IV-ii)⁽¹⁷⁾も出てくる。“Gismund”(1567)ではもっと古典的なコーラスで同じ非難でも古代の神々や伝説上の人物を例え話として出している。(I-iii, II-iii, III-iii, IV-iv等各場面の最後、計208行)ここで特徴的なのはコーラスが質疑応答形式をとっていることであ

る。

悲劇と異なって、喜劇では歌は軽い役割しか与えられていないように思われる。“R.Doister”には歌は2ヶ所しかないが、“Supposes”には皆無である。Chambers編の本書にはないが、“Promos and Cassandra”という喜劇には遊女、道化、下男の歌があるが皆、現状を風刺したり、視聴者である王侯貴族を讃えたりするものばかりである。その他、歌で予言や説明をする場合もあるが、それは悲劇にも通じるものである。

劇の登場人物が直接観客に語りかけるもう1つの場合として「独白」がある。これは傍白と混同しやすいが、他の登場人物に影響を与えずに自分の伝えんとすることを直接的に観客に吐露する。傍白は他の登場人物の陰にかくれて秘密めいて内心をさらけ出す。

独白は何といっても、新登場人物が自分の役割を説明する時に使われることが多い。“The Second Shepherd's Play”で牛泥棒のマックが自分の家計が苦しいから盗むのだ、と説明する所から始めて、“Gismund” (1567)の自分の境遇の叙述、⁽¹⁸⁾ “Cambises”の王⁽¹⁹⁾とアンビデクスターの自己紹介、⁽²⁰⁾ “Supposes”のパシフィロの目論見、⁽²¹⁾ “Promos and Cassandra”のアンドウルジオの同様の説明⁽²²⁾、同時代の“Cobbler's Prophecy”のマルスの登場理由の説明⁽²³⁾など主要人物でも自分を紹介する人に事欠かない。ましてや、マイナーな登場人物で冗長とも思われる自己紹介をするものは多い。“R.Doister”のシムはそのよい例である。⁽²⁴⁾ “Cambises”ある廷臣は「結婚披露宴の支度をしなくては」と登場するだけなのに長々と独白するし、⁽²⁵⁾ “Supposes”のダリオの卵の話⁽²⁶⁾も冗漫に観客に語りかけられている。

独白が登場人物の進退の説明に使われることは以上のような紹介の場面に限らない。舞台装置が簡素であった当時はSir Philip Sidneyも嘆いたように、観客は多大な想像力を要求されたであろうが、⁽²⁷⁾ 登場人物もそれなりに説明を多くして、その劇における自己の位置を観客に知らせたのである。例えば“R.Doister”のクスタンスはわざわざ自分が退場する、と退場している。⁽²⁸⁾ “Promos”の道化は「俺の雌馬はきつと森に隠れているに違

いないから探しに来た」⁽²⁹⁾と自分の行動の理由を説明している。又、舞台装置のせいに帰せられない説明的独り言も、例えば、前出のクスタンスの「何事が起きたか、見にきたわ」、⁽³⁰⁾ “Cambises” の王弟スミリディスの「宮廷は楽しくない、一人で居たい」、⁽³¹⁾ “Supposes” の田舎紳士の「この世の旅は危険なものだ」ではじまる台詞、⁽³²⁾ そして“Gismund” (1567) のギスハードの長い台詞、⁽³³⁾ などにたくさん見られる。

次に独白ではあっても神かそこにはいないものに対して呼びかけている態の台詞がある。前出の“Gismund”の中でタンクレッドが「娘よ、淋しい家に住まわせるなら俺を殺せ」⁽³⁴⁾と叫んだり、ギスモンドが心臓入りの金杯を通じてギスハードに呼びかけたり⁽³⁵⁾ “Supposes”でダモンが娘のことを嘆いたりする場面がこれにあたる。⁽³⁶⁾

以上の独白の場面は登場人物が観客に向かって、いわば真正面から語りかける体裁になっている。今度は役者が観客と舞台上の人物の両方に同時に語りかけている場面を考えてみよう。典型的な例は演説者が舞台上の群衆に演説をしている例で、これは姿勢が半分舞台に、半分客席に向かっているわけで、舞台演出に立体的効果を与えているのではないかと思う。

この、いわば、舞台と客席への「斜め」の姿勢で語られる独白は又、事件の報告の時にあらわれる。“Gismund” (1567) ではギズムンドの絞殺をつげるルナンチオはコーラスとやりとりしながら聴衆に報告しているし、⁽³⁷⁾ “Cambises” ではスミリディスの死⁽³⁸⁾ や王妃の死⁽³⁹⁾ を報告している。報告は布告としてなされたり、手紙を読み上げる形式でなされることもある。⁽⁴⁰⁾ 独り言と話しかけている言葉との区別がつかず、「受け」があって初めて聴衆と登場人物の両方に話しかけているのだ、とわかる場合もある。カンバイセスの死ぬときの長弁舌⁽⁴¹⁾ がこれにあたり、アンビデクスターの反応によって、王は惜別の念がその両者にあまねく知られるように「斜めの姿勢」で頑張ったのだということがわかる。⁽⁴²⁾

その反対に“Gorboduc”のアロストゥスの舞台上の諸脚にあてての演説のように64行中にyouを30回も繰り返すと(V-ii-115-179) 否応でも観客

は無視されざるを得ない。「斜めの姿勢」はあくまで登場人物が名指しされていないこと、そして尚且つ登場人物の存在が考慮に入れられている場合に実現される。

最後に傍白であるが、これは傍白が他の登場人物に気づかれないうもりを装って観客に話しかける形式をとる。これにはパラサイトの人物による台詞が圧倒的に多い。前出の“Cambises”のアンビゲクスターは、ホブとロブに対する「奴等に喧嘩をさせてやれ」という箇所⁽⁴³⁾でだけ傍白を言っているように見えるが、自分が二心あることを表明する際は堂々と自分一人による長台詞を他の登場人物がいる前でも披露している。“R.Doister”は少しドタバタした喜劇なので、主人公のラルフがクスタンスの侍女達のおしゃべりを盗み聞きしている時に「誰も俺が隠れていることを言てはいけないよ」とか「クスタンスの名が口にされているのを聞くだけで嬉しい」⁽⁴⁴⁾という傍白を言っているし、クスタンスも「シムが疑われないういけれど」⁽⁴⁵⁾以下の傍白を言っている。パラサイトのメリー・グリークは予想されるように傍白が多く12回、マイナーな人物ではあるがクスタンスに名指しされたシムも4回言っている。このメリー・グリークの、ドイスター達に対する「気がつかないふりをしよう」「からかってやれ」「お前がばかだということは保証するよ」「見えないふりをして突きとばそう」、自分は金持ちなのだ、と得意がるドイスターに対して「知っているさ、そうでなけりゃあんなに吹っかけないよ」、(ドイスターに「叩いた」と言われて)「もうじき叩くさ」等々の軽い台詞⁽⁴⁶⁾が彼のパラサイトの屈折した心理をあらわしたり、それによって又、主人公のお目出度さ加減が浮きぼりにされたりして、この喜劇の効果を高めているといえる。シムの傍白の面白さはクスタンスを疑って「何かあやしい」又はそれに類する台詞⁽⁴⁷⁾をクスタンスのごまかしの度に募らせていく過程にあり、話の筋とは直接関係ない漫才的なものである。

“Supposes”のパラサイトのパシフィロの傍白はこの両者を合わせたような面白味をもっている。彼は夕食をごちそうしてくれない医師に対して年齢を「十才は若く言っているよ」とか「断食していたのなら・・・死んだは

ずの人がしゃべっているよ」⁽⁴⁸⁾と憎まれ口を傍らで言っている。医師の下僕達は医師の敵に対して傍白を言っている。クスタンスの母はこの医師の前で「ポリネスタと結婚したければ、もっとよい眼をもっていなくちゃ」と傍白する。⁽⁴⁹⁾このような面白味を喚起する傍白は“The Second Shepherd’s Play”に出てくる羊飼いがマックの羊を赤ん坊だと言いくるめようとするのに対して「うそつけ」と傍らで言う⁽⁵⁰⁾ユーモアと同じ系統にぞくする軽口だと思う。

傍白でも必ずしも滑稽味と結びついていない場合もある。“Supposes”に出てくる、服装を取替えあったデュリッポとエロストラトは「どうしよう」と思案顔をしている場面が多いし、⁽⁵¹⁾パラサイトでプロモスの道化のジョンは王様歓迎の歌をうたったり、鞭打たれたり、お金をとられたりして愚痴をこぼすだけである。⁽⁵²⁾むしろラミアの下僕のロスコーのほうか主人とフェラックスの情事を暴露したりして雰囲気をやわらげている。⁽⁵³⁾この劇では牢番⁽⁵⁴⁾や役人⁽⁵⁵⁾、王の遣い等が⁽⁵⁶⁾プロモスの不正に対して批判的な傍白を少しづつ漏らしていることが目立つ。

傍白の機能のひとつである下心の吐露は悪人の場合に使われる。“Promos”のフェラックスは上記の劇中最も二心ある人物なので、「プロモスの悩みに取り入ってやれ」、「賄路をとろう」「王は罪をあばきにきたらしい」「悪事がばれそうだ」「仕方がない。慈悲を乞おう」と7回もこの種の気持ちをあらわしている。⁽⁵⁷⁾下心といえは悪人でなくても“Promos and Cassandra”におけるプロモスとカッサンドラは内心の吐露をする場面が多いので劇全体が重苦しい、理屈っぽい印象になっていると思う。

以上、チューダー朝の主要演劇の登場人物と観客の関係を直接的口上、真正面からの独白、斜めの姿勢の独白、そして傍白の順に概観してきた。劇では登場人物同士の話のやりとりと演技がアクションの主流を占めることは当然であろうが、これらの独白や傍白も劇に立体感を与え、観客の感興をより深く呼び起こす一助となっているのではないだろうか。全体として悲劇(“Gorboduc,” “Gismund”)には独白が多く、喜劇(“Ralph Roister

Doister,” “Supposes”)には傍白が多い。このように劇の種類と独白・傍白の頻度は関係があるのではないかといえる。中世道徳劇(キリスト生誕劇やその他の宗教劇、奇跡劇)や論争劇では独白・傍白は少ないのではないかという事と脚本のト書きで役者の姿勢や台詞の種類が指示してあるのではないかという事は今後見ていくべきだと考える。又、劇場の構造や役者の個性、その尊重度、検閲の有無など独白・傍白の応用の範囲や機会を左右する他の要素への考慮も必要である。ドラマティック・モノログのような演技抜き
の長い独白や、逆にミュージカルのように歌と踊りで観客を引き寄せる方法
などの発明、発達の中に独白・傍白が形をかえて取り入れられてきたのでは
ないかという事も興味深い課題であると思う。

注

- (1) Nethercot, Arthur H. et. al. eds. *Elizabethan Plays*, Holt, Rinehart and Winston, London, 1971.
- (2) 先行作品“Gosmund or Salerne” (1567)も参照した。
- (3) “The liturgical play had existed since the ninth century which had grown out of the enrichment of the mass and chorus at church.” p.xii, Clarence Griffin Child, intro. and notes in “*The Second Shepherd’s Play*,” ‘Everyman and Other Early Plays, Riverside Literature Series, Houghton Mifflin Co.
- (4) “When Aulularia (by Plautus) was performed in Latin before Queen Elizabeth in 1564, courtiers ignorant of Latin were wearied, but Elizabeth sat through the three hours’ performance without sign of fatigue.” E.K.Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. I, p.127.
- (5) Epilogue: As duty binds us, for our noble queen let us pray, /
And for her honorable council, the truth that they may use, /
To practice justice and defend her grace each day.

(6) R. Doister; God grant her loving subjects both the mind and grace, / Her most godly proceedings worthily and embrace. (V-v, 54-5);

Custance: The Lord strengthen her most excellent majesty, / Long to reign over us in all prosperity. (V-v, 48-9);

G.Goodluck; The Lord preserve over most noble queen of renown, / And her virtues reward with the heavenly crown. (V-v, 46-7);

T.Trusty: That her godly proceedings the faith to defend. (V-v, 50).

(7) On the occasion of printing "Tancred and Gismund," Wilmot addresses to the "Gentlemen Students of Inner Temple ... and of Middle Temple ,,,"

(8) "The Brome Abraham and Isaac" in *A Commonplace Book of the Fifteenth Century* (1886), Child, *op. cit.*, pp. 25-6.

(9) "Cambises," Prologue 1-36.

(10) "R. Doister," Prologue, 1-28.

(11) "Gismund" (1567), Prologue 1-32.

(12) "Cambises," Epilogue, 1-21.

(13) Damon が聴衆に向き直って言う。 " Nobles and gentlemen, if you suppose that our Supposes have given you sufficient cause of delight, show some token whereby we may suppose you are content."

(14) "Gorboduc," I-i, 382-93.

(15) "Gorboduc," II-ii, 82-107.

(16) "Gorboduc," II-I 168-90.

(17) "Gorboduc," IV-iii 267-93.

(18) "Gismund" (1567) I-ii 1-36.

(19) "Cambises," 7-20.

(20) "Cambises," 126-59.

- (21) "Supposes," I-ii 19-44.
- (22) "Supposes," I-iii 79-154.
- (23) Cobbler's Mars, 848-68.
- (24) "R.Doister," IV-i 24.
- (25) "Cambises," Preparation 965-70.
- (26) "Supposes," Dalio III-i 17.
- (27) Patricia Russell の引用から。Roman Narrative Plays; 1570-1590, John R. Brown, B. Harvis 編., *Elizabethan Theatre*, Edward Arnold 社., London, 1966.
- (28) "R.Doister," II-I 43.
- (29) "Promos," IV-ii.
- (30) "R.Doister," IV-ii.
- (31) "Cambises," Smirdis; 706-9.
- (32) "Supposes," II-ii.
- (33) "Gismund," III-iii 1-88.
- (34) "Gismund," II-ii 59-62; IV ii 1-20.
- (35) "Gismund," V-ii 24-86.
- (36) "Supposes," III-iii 14-20; 32-108.
- (37) "Gismund," (Rununchio) V-I 28-148.
- (38) "Cambises," (Ambidexter) 732-53.
- (39) "Cambises," (Ambidexter) 1126-51.
- (40) "Gismund" III-iii 57-71 手紙。
- (41) "Cambises," 終末部 1152-65.
- (42) "Cambises," (Ambidexter) 1166-79.
- (43) "Cambises," Ambidexter: By the Mass, I will cause them to make a fray.
- (44) "R.Doister" Doister の傍白 "I will stand here a while, and talk with them anon. I hear them speak of Custance, which doth my

heart good. To hear her name spoken doth even comfort my blood." (6-8 以下全て I-iii より)

"See what a sort she keepeth that must be my wife. Shall not I, when I have her, lead a merry life?" (33-4)

"It would grieve my heart to see one of them beaten." (40)

"And I will not away, but listen to their song." (49-50)

"Now might I speak to them, if I wist what to say." (88).

- (45) "R.doister" Custanceの傍白。"I come to see if any more stirring be here./ What mean these lewd fellows thus to trouble me still? / Sim Suresby here perchance shall thereof deem so ill, / And shall suspect in me some point of naughtiness, / And they come hitherward."

- (46) "R.Doister" Merrygreekの傍白。

(to Doister) "I told you, I, we should woo another wife." (I-ii-2)

"He is in by the week, we shall have sport anon." (I-ii-4)

(in front of Doister) "I will make as I saw him not; he doth me seek." (I-ii-6)

"I will not hear him, but make as I wrote." (I-ii-8)

(to Doister who says he has plenty of money) "That knew I right well when I made offer so large." (I-ii-40)

"Nay, unwise perhaps, but I warrant you for mad." (I-ii-80)

(Hearing Tibet cursing Doister):

"What is he when the little mouth doth as thereafter?" (II-ii-7)

"I will call her ---" (III-ii-9)

"I know where she is. Dobinet hath wrought some wile." (III-ii-12)

"We shall have sport anon; I like this very well." (III-ii-18)

(in front of Doister) "I will not see him, but give him a jut, indeed." (III-iii-7)

(to Doister who said, "Thou hittest me") "So I will." (IV-vii-50).

(47) "R.Doister" Sir Suresby の台詞。

"I will speak to her (=Custance)." (IV-ii-3)

(on Custance's statement) "Somewhat there is, I fear it." (IV-iii-7)

"(Let us hear them.) Somewhat there is, I fear it." (IV-iii-12)

"Wife? This gear go'th a crook." (IV-iii-32).

(48) "Supposes" Passiphilo の傍白。

"He tells ten less than he is. (in front of Cleander who says that he is fifty years old.)" (I-ii-21)

"Fast tell thou famish." (I-ii-158)

"He speaketh of a dead man's fast." (I-ii-160)

"Nor thou understandest me not." (I-ii-162)

"Better than my reward, by the Rood." (I-ii-182).

(49) "Supposes" の Balia の台詞。

"He must have better eyesight that should marry your Polynesta -- or else he may chance to oversee the best point in his tables sometimes." (I-ii-7~10).

(50) "Supposes" の Erostrato の台詞。

"Now can I hide me no longer. Alas! What shall I do? I will set a good face to bear out the matter." (IV-vii-1~3)

"What a mishap was this, that ..." (V-i-1)

Dulippo の台詞。

"Shall I make some sport with this gallant? What shall I say to him?" (II-iv-19)

"In faith, now, let me alone." (II-iv-30)

"Since I can do no better, I will set such a stance between her and Passiphilo that all this town shall not make their friends." (II-iv-34~35).

- (51) “Supposes” の Erostrato の台詞。
“Shatt shall I do? Alas! What remedy shall find for my rueful estate?” (IV-i-1~3).
- (52) “Promos and Cassandra” の John の台詞 ②III-ii.
- (53) “Promos and Cassandra” の Rosko の台詞 ②I-ii-1.
- (54) “Promos and Cassandra” の牢番の Andrugio を逃してよかったという台詞。IV-v.
- (55) “Promos and Cassandra” の Gresco の台詞 ②IV-i.
- (56) “Promos and Cassandra” の Ulrico の台詞 ②II-v, IV-i.
- (57) “Promos and Cassandra” の Phallax の台詞 ②III-v, II-iv, III-I, III-iii, IV-ii V-i.